

## IAU コロキウム No. 98 に参加して

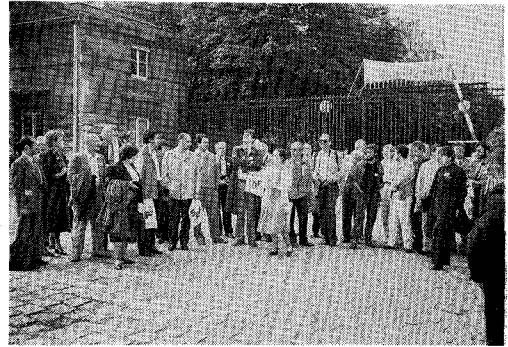
長谷川 一郎\*

1987年6月20日から24日まで「アマチュア天文家の天文学への貢献」と題する IAU (国際天文学連合) としては珍しいコロキウムがパリで開かれた。これはフランス天文学会 (SAF) の創立 100 年を記念して開かれたもので、この学会は、カミーユ・フランマリオン (1842~1925) によって設立され、常にフランマリオン精神を継承して行くことを目標の一つにしていることを知ってもらうための行事でもあった。そしてコロキウムと並行して SAF の記念集会も行われ、会期中にムードン天文台で 60 年以上の永続会員や SAF の発展に功績のあった人の表彰式などが行われた。

このコロキウムの科学組織委員長は IAU の事務総長をしたことのある J. C. ベッカー教授で、委員にはアメリカ変光星観測者協会のジャネット・マテイ会長や、グリニジのゴードン・テイラー (BAA 計算課長)、ベルギーのケッケレンベルグ (太陽黒点) のほか、わが国の古在由秀氏や中野圭一氏がいた。国内委員長は SAF の会長であった P. シモン (ムードン天文台、電波天文学) であった。コロキウムの主要テーマは、歴史 (アマチュアの貢献の昨日、今日)、観測 (天文観測におけるアマチュアの貢献) 及び普及 (天文学の普及と教育への貢献) の 3 つにわかれていて、全部で約 120 件の口頭発表と、約 20 件のポスター展示が行われた。出席者は、フランスからが当然最も多く、次にアメリカ、スペイン、西ドイツ、イギリスなどで総勢約 250 人。日本からは富田弘一郎氏 (測地衛星の観測協力、ポスター) と佐久間精一氏 (日本における変光星の観測、ポスター) と私 (日本における彗星・小惑星の発見と観測、口頭) の 3 人だけであった。なお出席できなかったが木村精二氏 (アマチュア天文発表大会の 20 年、録音再成) と大阪市立電気科学館の北沢淳氏 (日本のプラネタリウム、ポスター) や変光星の光電観測 (ポスター) の報告が行われた。

アマチュア天文家の分類規準について述べたトマス・ウィリアムス (アメリカ) によると、昔から天文学の分野では貴重な業績をあげているアマチュアが多くいて、いわゆる素人というわけにはゆかない場合がある。そして世の中には、プロの天文屋と、いわゆるアマチュアといわれる人やプロになった元アマチュア、プロと同等と考えられるアマ、そして多くの天文家とはいえない天文ファンなどがある。従って簡単にひとことでアマチュア

\* コンピューター・コンサルタント (株) Ichiro Hasegawa



パリ天文台入口にて、中央は説明するデバルバ女史、左後の建物は IAU 事務所



ラ・シテ・デジャンス (ビレット) 見学会の集合風景。右端は J. C. ベッカー教授

ときめつけてしまうのはよくないという。どこの国でもそうであろうが、特にフランスではプロとアマの相互協力は盛んなようであった。ムードンやストラスブールの天文台では太陽や惑星面の協同観測が行われているし、ピク・デュ・ミデイ天文台の口径 60 センチの反射望遠鏡は、1983 年からアマチュアの使用が許され、1985 年には「60 センチ連合 (Association T60)」が結成され、既に 500 人のアマチュアが参加しているという。60 センチのほか、1メートル鏡の観測時間の 30% はアマに開放されている。T60 では、短周期彗星の早期検出もやりたいということであったが、これは関勉氏の芸西観測所 (60 センチ 五藤望遠鏡) での仕事を強く意識してのことであろう。またメルランは新彗星の発見条件に関して過去 25 年間の統計について述べたが、特にシワスマン・ワハマン第 1 周期彗星の協同観測を提案した。この彗星は、木星軌道の外にあって、円に近い軌道を描いて運動しており、通常は 18 等級ぐらいであるが、時々急



ムードン天文台太陽塔の下で。左は佐久間精一氏，右は富田弘一郎氏

増光する大へん珍しい彗星である。ハレー彗星の際に実施された IHW 計画のように、この彗星の連続した観測を国際協力によって進めようというのがメルランの主旨である。このほか連星、変光星、太陽、及び掩蔽観測の分野でのアマチュアの業績が紹介され、今後の観測と研究が一層盛んになるように期待された。私は日本のアマチュアが、彗星や小惑星の発見と観測について活躍している現状について報告した。そして何人かの観測者や計算者及びその観測所や器械設備をスライド写真によって紹介した。さらに流星の観測と新星の発見についても述べたが、特に新天体の発見の確認と通報について東京天文台が果している役割が、日本のアマチュアの活動を大いにエンカレジしていることを紹介した。海外の人々は日本の天文アマチュアの実情を知りたがっているが、実際にはほとんど知られていず、自分でいうのは少し気がひけるが、私の報告は、多くの人々の関心をひいたようで、何人もの人が、直接、私にいろいろと話かけてくれた。もっとも、これにはスミソニアン天体物理学天文台のマースデン氏（天文電報中央局と小惑星センターの責任者）が、アマチュアによる新天体の発見について報告したことが大きくものをいったようである。同氏は、系外星雲の超新星の実視観測による発見は、オーストラリアのエバンスが断然、他を圧しているが、それ以外の彗星や小惑星及び新星の分野では、日本のアマチュアによる貢献が最も大きいことを強調していた。

さて、コロキウムの日日の夕方から、パリ天文台の見学が行われた。ちょうどパリ天文台の歴史に関する展示が行われていたが、私には、カルテ・ド・シエルのことが特に印象に残った。また4日目は会議はなく、朝から見学が行われた。まず、パリ市の北東部に最近建設された科学産業館（ピレット）を訪ずれた。ここでは生命から宇宙まで、各種のテーマによって、たとえばロケットや人工衛星、コンピューターなどが展示してあり、プラネタリウム（スピッツ製）もあって、初等教育にも活



フランス天文学会百周年記念メダル

用されていて、各地から学習に来る生徒達のための宿舎も出来ていた。つづいて昼にはパリ市役所を訪問し、大へんおいしいジャンペンをご馳走になった。午後はムードン天文台を見学したが、広い敷地の中を歩いて、いささか疲れた。大ドームでは、ドルフス氏が、83センチ望遠鏡について説明してくれた。ムードンでは、この日、先に述べたように SAF の表彰式が行われたが、この会期中、エッフェル塔の2階では SAF によって各種の天文教材や図書の展示販売が行われていた。また3日目の夜には超新星に関して、さらに最終日には英国のムーア氏の「月と惑星の観測」と題する一般講演が行われた。ムーア氏の講演は約 80 分続いたが、この間、一回のよどみもなく、大きな声で、わかりやすい言葉で話し続けたのには感心した。彼は身体も大きく、強烈なエネルギーを感じた。

閉会式では、SAF の 100 周年を記念して、世界中から選ばれた 12 名のアマチュアが表彰された。日本からは、本田実氏（彗星と新星の発見）と、関勉氏（彗星と小惑星の発見）が選ばれ、表彰状と 100 周年記念のメダルが贈られ、私が両氏に代って受取った。

このコロキウムは、連日、盛り沢山で、内容も大へん充実したものであった。報告書は、仏・英両語で近く出版される。歴史的に見て、アマチュア天文家が果して来た功績は大きかったことは確かであろう。しかし問題は巨大化し、高度化するこれからの天文学に対して、アマチュアはどれだけの貢献をすることができるかであろう。しかし幸か不幸か、天文学の守備範囲は、時・空ともに広大である。アマチュアの協力は、今後も必要であるし、また貴重なものであると私は思う。ただしこれには、アマチュアに対する暖い指導とはげましがぜひとも必要である。またアマチュアも、いたづらに独りよがり和我流に走ることなく、真摯な努力を続けることを忘れてはならないと思う。そしてプロ・アマ相互の協力によって、すばらしい成果があがることを期待したい。それにつけても、今回のコロキウムへの日本からの参加は、あまりにも少なかった。IAU に限らず、国際的な会合には、日本のアマチュアも、もっと参加してもよいのではなからうか。